慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マーカス・クライン著『疎外以後：現代アメリカ小説論』：Marcus Klein : After Alienation : American Novels in Mid-Century (The World Publishing Co., 1964. $ 5.95)
Sub Title	After alienation : American novels in Mid-Century, by Marcus Klein
Author	大橋, 吉之輔(Ohashi, Kichinosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.129- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マーカス・クライン著『疎外以後——現代アメリカ小説論』

Marcus Klein: After Alienation—American Novels in Mid-Century

(The World Publishing Co., 1964. $ 5.95)

大橋吉之輔

一九五〇年代から今日に至るまでのアメリカ小説を、Saul Bellow, Ralph Ellison, James Baldwin, Wright Morris, Bernard Malamud などの作家の作品を例証として、論評したものである。表題の『疎外以後』からもうかがえるように、学術書というよりはむしろ鋭どい文芸批評の労作であり、明らかにジョン・オールドリッジの『ロスト・ジェネレイション以後』(John W. Aldridge: *After the Lost Generation*, 1951) をふまえ、それ以後のアメリカ小説の状況を分析したものである。

コロンビア大学を卒業し、現在はバーナード・カレッジの助教授である著者は、最近十数年のアメリカ小説のなかに、「なにか新しいもの」を感知し、それを右にあげたような作家の作品を緻密に分析していくことによって、明確にしようと試みた。そして、その結論として、著者が指摘しているのは、「疎外」から「調節」(accomodation) へと移行しつつある現代文化の推移に、現代アメリカ作家たちは積極的な興味を示しているということである。

もちろん、「疎外」から「調節」へ、といっても、それは、今世紀前半の文学状況に見られた、反逆的なアウトサイダーの姿勢に対比される「順応」(conformity) といったような単純なものではない。それはむしろ、「同時に起る参加と離脱」(simultaneous engage-

ment and disengagement）といったようなものである。自我の解放あるいは自由を成就した現代人は、その瞬間に、自分が孤立させられてしまっていることを知る。逆に、社会にたいして積極的にはたらきかけ、その一員としての立場を主張したり、異性にたいして愛の行為をもとめるとき、同時に、自己の存在証明（アイデンティティ）を犠牲にしてしまっていることも知らされる。そして、現代人の「冒険」は、その両極のあいだを行きつ戻りつするところにある。このような状況が、もっとも典型的に見られるのは、アメリカ社会においては、もちろん、これまで被圧迫種族であったユダヤ人や黒人たちのばあいであるが、それはあくまで典型であって、この状況は一般的、普遍的である。

このようにいえば、まずすぐ思い出されるのは、マラムドやベロウたちユダヤ系作家の諸作品、ことにベロウの初期の『宙ぶらりんの男』（*Dangling Man*, 1944）や『犠牲者』（*The Victim*, 1947）の主人公たちや、エリスン、ボールドウィンなど黒人作家の作品のことである。事実、著者クラインがもっとも精力をそそいで分析しているのも、それらの作品であるが、ライト・モリスのことを論じることも、著者は忘れてはいないのである。著者は、歴史的に見て、一九二〇年代の反逆＝疎外、一九三〇年代の「政治への参加」の時代、をへて、第二次世界大戦以後の文学は、それらの微妙なジンテーゼのような局面を展開しはじめているといい、したがって、反逆者ないし疎外者の態度を戦後もなお維持し、「政治への参加」にたいしてもそのような態度をくずさないノーマン・メイラーやビート・ジェネレイションの作家たちは、社会や文化の質的な変化や、社会と個人との関係の微妙な推移に気づかない人たちで、かれらの作品の挫折もそこにある、と主張している。

ノーマン・メイラーたちが戦後状況の基点を、「原水素爆弾の出現」と「ナチの捕虜収容所の残虐」とが象徴するところに求めたのは正しいとしても、その展開にたいする発想においては、いわば時代錯誤的な誤まりを犯しているし、精神の錯乱や分裂はすでに二十年代、三十年代をへた全人類が経験したことであって、それらをいわば定着した局面のように認識する方法も妥当ではない、と著者はいっているかのようである。そのかぎりにおいて、私は年来の蒙をひらかれたように感じたし、新しい視点を教えられたようにも思ったが、一方では、「疎外」と「調節」とのあいだにある現代人の「冒険」の行方がどのようなものであるのか、そのことにたいする明確な示唆がないのは不満であった。もし著者が、あのリアリズムとファンタジイの奇妙な交錯であるジェイムズ・パーディの佳作『マ

ルコム』（James Purdy: *Malcolm*, 1959）をとりあげ、永遠の少年マルコムが「現代人」との残酷なふれあいにおいて、死に至る経過を考究していたら、なんらかの示唆が行なわれていたのではないかと考えるのは、私のひとりよがりであろうか？